

連 載



は じ め の 一 歩



第 19 回

ファミリーパートナーシップモデルに基づいた 産前・産後の親子支援について

岡光基子 Okamitsu Motoko

東京医科歯科大学大学院保健衛生学研究科

はじめに

胎児期からの切れ目ない支援の産前・産後サポート事業として、行政における妊産婦への相談支援が実施されている。とくに、フィンランドのネウボラを参考にした、日本版ネウボラとされる子育て世代包括支援事業が全国各地で導入され、展開されている。しかし、実際の支援は看護専門職の個々の努力によるものが大きく、エビデンスに基づいた具体的な支援方法や内容の検討は十分とはいえない状況である。

このような現状から、本稿では、英国における産前・産後の親子支援を紹介し、日本での妊娠期からの継続した支援の方法について示唆を得るための一資料としたい。

英国の親子サポートセンターの紹介と取り組み

英国のロンドン大学キングスカレッジの親子サポートセンターでは、センター長である心理士のCrispin Day博士を中心とした研究者らによって、さまざまな親子支援プログラムが開発され、広く普及している。これらのプログラムは、ほぼ英国全土にわたるNHS (National Health Service : 国民保健サービス)の事業として主に専門職を対象としたトレーニングが実施されている。親子支援プログラムには、ファミリーパートナーシップモ

デル(Family Partnership Model : FPM)¹⁾⁻⁴⁾に基づいた産前・産後プロモショナルガイドシステム⁵⁾⁻⁸⁾、家族支援プログラム、親のエンパワーメント、地域社会のエンパワーメントなどがある。とくに親のエンパワーメントは親が親を支援するプログラムであり、専門職のみならず地域全体での育児支援を目指している。センターでは主に地域で活躍する実践家を養成し、支援者の資質の向上のための教育的な支援を行っている。また、親子の保健サービスに関連した研究が遂行されている。

産前・産後プロモショナルガイドシステム

1) 専門職を対象としたトレーニング、講習会プログラムの内容

産前・産後プロモショナルガイドは、保健師・助産師・看護師など、妊娠期あるいは産後の早い時期の親子にかかわる看護専門職が、親との対話を促進するためのツールとして開発されたものである。フィンランドや英国をはじめとしたヨーロッパ5カ国で実践されたEuropean Early Promotion Project (EEPP)⁹⁾¹⁰⁾が基になっている。これは複雑かつ長期的な問題をもつ家族への育児支援にも有用であるとされている。このシステムは英国教育省より推奨されており、英国ではすでに5,000人以上のヘルスビジター(日本では保健師のことをいう)



図1 産前・産後プロモショナルガイドのガイダンスノート



がトレーニングを受けている。また、300人以上の専門職がトレーナーの資格を有している。

産前・産後プロモショナルガイドは2日間の講習会で訓練される。講習プログラムには、胎児期からの子どもの脳の発達、母親の逆境的体験と胎児・乳幼児の発達、小児期における逆境的体験、親になることへの適応と子どもへの影響、夫婦関係が育児に及ぼす影響、親子の発達課題と相互作用、早期の親子のスキルと能力などの内容が含まれる。マニュアルとして活用する「ガイダンスノート」に対話を促進するための方法が示されている(図1)。また、親子の強みやニーズを明らかにするための「ファミリーストレス&ニーズサマリー」の使い方

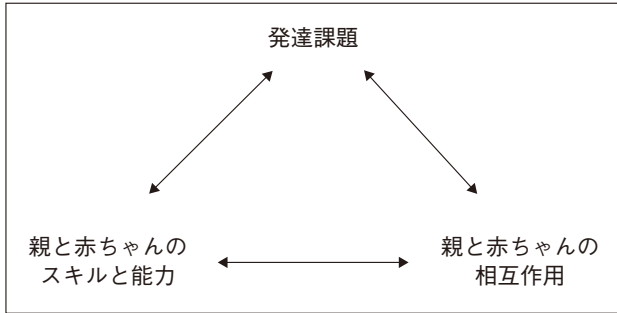
や、両親との対話をガイドするために用いる「トピックカード」の活用方法についても学習する。トレーニングは講義形式だけではなくディスカッションにより進められ、事例によるケーススタディや映像を用いた親子の相互作用の観察、ロールプレイなどが含まれる。

2) 支援の目的・方法と内容

産前・産後プロモショナルガイドは、支援者と家族の間で効果的なパートナーシップを築きながら、共通の目標を設定し協働していくことを目指している。子どもの出生直後の発達や、母親と父親双方に、親になることへの移行を促進することを目的としている。より詳細な



図2 親と乳幼児の発達



情報に基づいて赤ちゃんや家族のニーズを明らかにしていく。

実際の産前・産後プロモショナルガイドを用いた支援は、最少でも産前に1回、産後に1回の計2回のコンタクトを基盤としている。産前は妊娠20週以降の導入が望ましく、産後は生後6～8週くらいの時期に行う。インタビューではなく、対話を促進するものである。妊娠前から夫婦ともに同席していることが望ましく、産後は子どもも一緒にいる状態で行う。

産前・産後プロモショナルガイドでは、誕生した子どもとその家族が最善のスタートを切るために、下記にあげる5つの要素が重要であると考えられており、このような視点から親子を理解し、支援をしていく⁵⁾⁻⁸⁾。

- ①夫婦の関係性
- ②妊娠期からの継続した親子のケア、相互作用
- ③親子の成長・発達
- ④家族とソーシャルサポート
- ⑤親子の心身の健康

夫婦関係が育児に及ぼす影響に着目し、母親だけでなく父親を含めた支援を行う。また、発達しているのは子どもだけではなく、親もまた、親になるという変化をとおして、さまざまな発達課題を達成しながら成長していく。親子がもっているスキルと能力が相互関係を円滑に進行させ、親密な相互作用を繰り返すことにより、さらにスキルと能力が向上していく。親子は相互作用の過程で成長し、双方が発達課題を達成していくのである(図2)。

ファミリーパートナーシップモデル(FPM)とは

親と支援者との間のパートナーシップはFPMにおける支援プロセスの中核を成している。すなわち、支援プロセスにおいて、親と支援者がつねに効果的な関係性を形成しながら支援を行う(図3)。

1)親と支援者の関係性のタイプ

一般に、支援される側と支援する側の関係性は、エキスパート(専門家)・友好・依存・敵対・回避・パートナーシップなどさまざまなタイプがある。とくに支援者側はエキスパート(専門家)として知識の提供や指導を行う場面が多いため、そのような関係が形成されることがある。友人のように仲良くなり相互の距離が近すぎる関係や、支援される側が支援者に依存してしまう関係もある。まれに意見を対立させ、関係性に困難を生じる場合もある。回避の関係とは、例えば、支援される側が支援を避け、拒否する場合はこれにあたり、連絡がとれず会えない状態が続く。

では、パートナーシップとはどのような関係なのか、詳細を述べる。

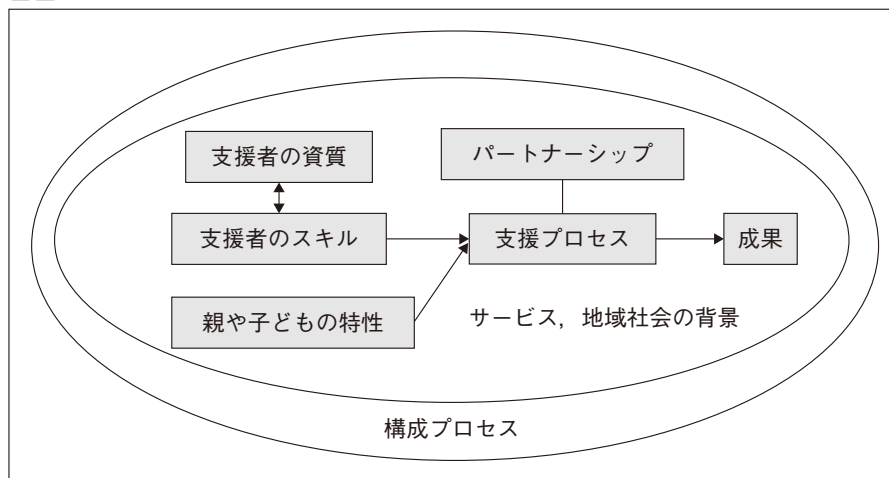
2)親と支援者のパートナーシップ

親と支援者は、共通の目的のために積極的に協働し、互いを尊敬し信頼する。また、明確でオープンな方法でコミュニケーションをとり、互いの見識、優先順位、ゴール、アイデア、違い、経験を尊重する。共に価値ある存在として認め、どのようなことを考え、何を大切に思っているのかを理解しようとする。目標設定は支援者が一方的に提示するのではなく、親自身が考えて設定できるように支援する。親と支援者は、互いの知識・強み・専門性を尊重し、それらを相補的に統合する。支援プロセスの目的や結果について一緒に話し合い、それに関連する事柄を遂行するうえでの責任を共有する。さらに、決定事項について交渉し、食い違いが生じた場合にはそれらを解決する。

3)支援者の資質とスキル

親とパートナーシップを形成するために必要とされる支援者の資質は、礼儀正しく誠実で、謙虚であることで

図3 ファミリーパートナーシップモデル



(Day C, Ellis M, Harris L : Family partnership model reflective practice handbook. Centre for parent and child support, London, 2014. より、改変)

ある。また、共感的で清廉であり、温かく静かな熱意をもっていることとされている。専門性の高い知識、経験や技術をもっていることや、判断を下すうえで建設的で繊細であることなどが支援者に求められる資質の特徴である。

支援者のスキルとして、以下の5点が重要である¹⁾⁻³⁾。

- 心のこもった傾聴
- 共感ある理解
- 強みや心配事の共有
- 優先事項や目標の明確化
- 戦略と行動プランの提示

親が支援者にしっかりと話を聞いてもらえたと実感することが重要である。支援者に共感してもらった、寄り添い、理解してもらえたと感じるように支援する。親の心配事やニーズ、もっている強みを明らかにし、共有する。たとえ問題解決に至らなくても、親の優先事項や大切にしていることを確認し、目標について話し合い、明確にする。この過程において、親が前向きな気持ちになり、励まされ、勇気づけられたと感じるような支援が求められる。さらに、親と支援者が具体的な方法や手段を一緒に考え、戦略を立てていくことが重要である。

実践におけるファミリーパートナーシップ

FPM を用いた支援プログラムの実践の有用性について、いくつかの介入研究の報告があるので紹介する。Barlow¹¹⁾ は、RCT (randomized controlled trial : 無作為化比較対照試験) により介入効果を測定し、検討している。FPM を受講したヘルスビジターが産前から家庭訪問による支援を行った介入群は、対照群に比較して、生後12カ月時の親子の相互作用における親の感受性と子どもの協同性が有意に高い値を示していた。また、オーストラリアの Kemp¹²⁾ は、産前・産後プロモショナルガイドを参考に作成されたトレーニングを受けた支援者が行った支援の効果を検討する RCT による研究を行った。生後12~24カ月の子どもをもつ母子を対象とした研究で、介入群の親は、情緒的で言語的な反応性が、対照群に比べて高かったことが示された。また、トレーニングを受講した支援者は、家族のニーズをより理解することができるようになるといわれている⁹⁾。

おわりに

妊娠期と乳幼児期は、子どもの発達と親になるための適応にとって非常に重要な時期である。親子がこの時期をいかに過ごすかによって、その後の将来を大きく左右

し、短期的および長期的な影響を及ぼす。子育て世代包括支援センターが各地で開設され、展開されているが、実践で活躍する看護専門職は、いまだ手探りの状態で妊娠期からの切れ目ない支援に取り組んでいる。フィンランドでは産前・産後の親子支援はネウボラではなく、すでにファミリーセンターに移行しており、家族中心の支援が重視されている。

現在、わが国でも、筆者らの研究チームが、産前・産後プロモーションガイドシステムのガイダンスノートやリーフレット、トピックカードなどの教材を翻訳して日本語版を作成し、講習会を開催している。今後は、このような産前・産後の親子支援にかかわる専門職を対象としたトレーニングの方法を検討していくことが重要である。また、看護専門職による家族中心の支援の在り方について検討していくことが求められる。

【文 献】

- 1) Day C, Ellis M, Harris L : Family partnership model reflective practice handbook. Centre for Parent and Child Support, London, 2014.
- 2) Davis H, Day C : Working in partnership with parents. 2nd ed. Pearson, London, 2010.

- 3) Davis H : Counselling parents of children with chronic illness or disability. British Psychological Society, Leicester, 1993.
- 4) Barlow J, Stewart-Brown S, Helen C, et al : Working in partnership : the development of a home visiting service for vulnerable families. Child Abuse Review 12(3) : 172-189, 2003.
- 5) Day C : Antenatal promotional guide, guidance notes and strengths and needs summary. 2nd ed. King's College, London/South London & Maudsley NHS Foundation Trust, 2012.
- 6) Day C : Postnatal promotion guide and guidance notes and strengths and needs summary. 2nd ed. King's College, London/South London & Maudsley NHS Foundation Trust, 2012.
- 7) Day C・著(三国久美・訳) : 産後プロモーションガイド : ガイダンスノート(日本語版). 廣瀬たい子・発行, 東京, 2015.
- 8) Day C・著(大久保功子, 塩野悦子・訳) : 産前プロモーションガイド : ガイダンスノート(日本語版). 廣瀬たい子・発行, 東京, 2016.
- 9) Davis H, Tsiantis J : Promoting children's mental Health : the European Early Promotion Project (EEPP). Int J of Mental Health Prom 7 : 4-16, 2005.
- 10) Puura K, Davis H, Papadopoulou K, et al : The European early promotion project : A new primary health care service to promote children's mental health. Infant Mental Health J, 23, 606-624, 2002.
- 11) Barlow J, Davis H, McIntosh E : Role of home visiting in improving parenting and health in families at risk of abuse and neglect : results of a multicentre randomised controlled trial and economic evaluation. Arch Dis Child 92, 229-233, 2007.
- 12) Kemp L, Harris E, McMahon C, et al : Child and family outcomes of a long-term nurse home visitation program : a randomised controlled trial. Arch Dis Child 96(6) : 533-40, 2011.